二十一　永平寺山門に立つ

十一月、永平寺に行った。旅の終わりにそこへ寄るというツアーに参加したのである。じつは去年そのツアーを見つけて、いったん予約したのをキャンセルしていた。やっと、尊敬する道元の開いた寺に行ってみたいという以前からの思いが実現。と言っても、道元という人をいくらかでも理解しているかはおぼつかない。だいぶ前に講談社の小冊子『本』の連載で、二人の気鋭の学究が、現代的な議論の仕方で『正法眼蔵』を読み解いたときにも、字面を追うのがやっとだった。園丁の永平寺参りは、雲水の参禅ではなく物見遊山の旅に過ぎない。

永平寺は、九頭竜川南の山塊にある小さな谷筋の奥にある。京の深草に寺を建てたが、南宋で習得した徹底した座禅が比叡山の旧仏教から迫害を受け、支援者となった武士が自分の所領に招いてここに移ったのだという。一つの機縁がこの地に禅道場を生み出したのである。伽藍の建物は大きく、それらを結ぶ階段もがっしりしたものだ。ところが、この文に結構という言葉を使おうと思って『広辞苑』を見たら、『正法眼蔵』の「いたづらに殿堂精藍を結構する」という用例が第一に挙げてあった。ひたすら座禅の修行を追求する

道元には、大きな堂塔は必要なかったのだと分かる。そうすると、この大きな構えはのちの時代につくられたのだと考えられる。そう思って見ると、大きな堂宇が狭い斜面に窮屈に建っている。寺の最初の名は傘松峰大仏寺だったらしいから、建物に迫るうっそうとした森は当時に似ているのだろう。仏道と禅についての厳しい議論と対照的な「傘松道詠」のやわらかな和歌は、この森の中での生活から生まれたのだ。

永平寺には、わたしのような観光客がおおぜい来る。招き入れられる大広間は文字通りとても大きい。格天井の二百三十枚の板には彩り豊かに花鳥の絵が描かれている。昭和初期の著名な画家たちの作品だそうだ。寺に入る前にバスガイドが、その中から幸運に恵まれる五枚の絵を見つけてくださいと言った。しかし道元禅師は、非常の対応として「凍えている人を温めるのに仏像を燃やす」ことを認めた人だから、俗な縁起かつぎなど勧めないだろう。もっともわたしは、永平寺に来るバスの中で家族の吉報を受けとって喜んでいたので、人のことをあれこれ言う資格はない。この広間の正面左手にある現貫主の大きな肖像画に「第七十九世…猊下」と書いてある。猊下という敬称が実用されているのをはじめて目にした。寺の格を重んじる傾向がおのずと生じていると見える。

法堂で、一人の先輩が二人の新来の僧に行儀を教えていた。道元は座禅道場での日常生

活の作法を修行の一部としたから、その規則の習得は重要視されているのだろう。しばらく眺めていたわたしは、剃った頭も青いまだ童顔を残す一人を指導する先輩のようすに横柄さがにじんでいると感じた。よけいな言葉を発しないことが重んじられているとはいえ、指示の所作が少しぞんざいに見える。求道の修行者として心構えが足りないと思い、剃髪しても身を修めて向上する努力が要ることを知った。

寺を出ると、参道に十余りのみやげ物店が並んでいる。「永平寺御用達」という看板が掛けてあり、禅寺で供される精進料理などのみやげ物を売っている。ここに着いたときには、食事も出す店で精進料理の昼食と聞かされて、どんな料理が食べられるかと期待していたら、ごま豆腐や蕎麦などに焼き魚とエビのてんぷら。ツアーのバスは、まっすぐ福井駅へ向かわずに途中で羽二重餅の店に寄る。ここで永平寺の発行した「命永平寺御用」と書いた板を見つけた。これも方便と言うべきか。だが、『正法眼蔵』を著わした筆法鋭い理論家の批判を免れることは難しいかもしれない。

座禅の講習に参加しない見学者は、堂宇を巡る順路を一周して最後に山門のところに来る。本来この山門はなまじの者に対する関門である。テレビで、入山を希望する修行者が雪の日にでも何時間も待たされる映像を観たことがある。貫主を除けば入門修行者だけが

一度きり出入りを許されるらしい。観光客はその関門を通らずに脇から回廊に入り、おしまいに山門を見上げて、また脇へ退出するのである。

道元の法嗣は懐奘という人で、年少の道元に師事し、『正法眼蔵随聞記』を書いて師をたたえたことは知っていた。旅から帰って永平寺のことを調べたら、懐奘たちは日本独自に興った達磨宗に属していたが、中国で達磨から相伝の仏法を継承した道元に集団で帰依したものらしい。ところが懐奘の次の代になると、道元の遺風と達磨宗系の民衆教化の考えが対立する争いが起きたという。曹洞宗が二派に分かれたのはこの争論によるそうだ。ここ永平寺は一時無住の状態にまでなったという。

日本人にめずらしい理論家で実践家でもあった道元の思想は、むしろ孤高の傾向を帯び、必ずしも受け入れやすくなかったのだと知られる。だが『正法眼蔵』は現代でも、先に触れたように秀でた学究が取り組むほど内容のある思想である。山門の下で門外漢は、道元の生活全体の中に意味を観ようとした生き方に思いをはせた。それを見習えば、石ころだらけの土を耕す園丁も、内海に映る円月をいつか釣り上げることができるだろうか。

二〇一四年紅葉の頃